

厚生労働大臣賞 沖縄県 大城 和輝 様（高校生 男性）

中学生の頃、社会科の授業で「年金」について学んだ。当時の私は「年金」は成人したら払わないといけない税金のようなものという程度の低い認識で、「何故、年金を払わないといけないのだろう。」という嫌悪感すら抱いていた。そんなある日、年金に対する私の意識を180度変える出来事が起こった。

中学2年生の春、私の父は静かに息を引き取った。父の病気が発覚してからちょうど1ヶ月。父の死はあまりにも突然で、現実を受け止められずにいた。父の死と同時に我が家の収入はゼロになった。40代半ばの母は父の看病の為に仕事を辞めており新しい働き口すら見つからないという状況で、これから訪れる先の見えない日々を考えると不安でいっぱいだった。すると、そんな私に母が

「大丈夫よ。心配要らないからね。」

そう言って見せてくれたのは、1枚の紙切れだった。そこには「国民年金・厚生年金保険年金証書」と記されていた。母に記された内容を尋ねると

「お父さんが2ヶ月に1度、お金を届けてくれるのよ。お父さんが今まで一生懸命働いてくれたことと、私達が沢山の人に支えられていることに感謝しなさいね。」と言って微笑んだ。そう語る母の目はとても強く、小さな背中が何倍も大きく感じた。

私は今まで、年金は老後のための積立貯金だと思っていた。自分が払ったお金が返ってくるだけなら銀行預金とさほど変わらないし、むしろ利息もつかない上にこの先貰える保障もないものを税金のように払うよう強制されるのはおかしいと。しかし父の死によって年金に対する印象が180度変わった。年金は、この国の人々が助け合い、より良い暮らしをするための1つのルールであるとともに、思いやりのかたちなのだと私は実感した。

私の家族は遺族年金に助けられている。もし遺族年金を受給していなかったら、高校進学さえ危うかったかもしれない。学校生活を楽しむ余裕もなく、仕事をする母を助けるために家事に追われる生活を送っていたかもしれない。それを思う

と、父が居た頃と変わらない生活が出来ることは、かけがえのない幸せなのだと感じる。

遺族年金は、父がコツコツ働き納めてきた国民年金、厚生年金保険料と顔も知らない大勢の人々の納めた年金保険料が使われている事を私は知った。遺族年金は何も語らない。ただ、決まった日に決まった額が振り込まれるだけ。しかし、通帳に記載された無機質な数字の羅列は私に語りかけるように父のことを思い出させる。父が仕事熱心だったことや数々の思い出。そこには、父が歩んだ人生、生きた証を感じる。遺族年金は父の生きた証であり絆であると言えるのだ。

私もあと4年もすると二十歳となり、年金を納める側の立場になる。その時には今お世話になっている分、この国の皆さんに恩返しをしたい。私と同じような状況下にある人達を今度は私が支えてあげたい。手を差し伸べてあげたい。今、私の心には「払わなければいけないから」ではなく「こんな自分でも、何かできることがあるなら」という確かな思いを感じる。今は、自分の可能性を信じ将来への選択肢の幅を広げるために、大学受験と向き合い学業に励みたい。それが今、私に出来る精一杯のことだと思うから。

年金が支給される偶数月の15日。

「お父さん、納付者の皆さん。ありがとう。」といつも思う。